

〔研究論文〕

## 文学者によるアッツ島玉砕言説分析

松本 和也

〔Article〕

**Analysis of Discourses on the Battle of Attu That Literary Persons Described****Katsuya MATSUMOTO****Abstract**

In this paper, I analyze discourses on the Battle of Attu written by literary persons.

The issues of interest in this paper are as follows: how literary persons described the Battle of Attu, how the discourses semantically effected, and how the literary persons kept their social status. To deal the issues above, I classified discourses with a motif of the Battle of Attu into three types: verse, prose (non fiction), and creation (fiction). Next, I analyzed each of the three genres from seven points of view, and revealed the respective characteristics in representing the Battle of Attu. Finally, I synthesized the analyses above and argued that during the Pacific War, literary persons had described the war to encourage the national policy, as well as to secure their social status.

## 1

アジア・太平洋戦争期の文学活動は、戦後(以降)の価値観から否定／黙殺されがちな状況がつついてきたが、当時／現在を相対化した歴史的な再検討が多方面で進む中、文学(史)研究においても徐々にそうした動きがみられるようになってきた<sup>1</sup>。とはいえ、ながらく等閑に付されてきた昭和10年代の文学研究は、緒に就いたばかりであり、継続的な各論の蓄積が求められている。

本稿は、こうした問題関心からアッツ島玉砕<sup>2</sup>をめぐる文学的言説を俎上にのせる。太平洋戦争開戦から半年、北方の戦局にも大きな展開がみられた。当時の状況の一端を確認するために、深澤幹蔵『アリユーション襲撃戦記』(大和書房、S17)に付された、谷萩那華雄「序」を次に引いておく。

昭和十七年六月の七日、八日のアリユーション奇襲攻略戦は、緒戦以後敗戦つゞきのアメリカが『季節がよくなつたら必ずやるぞ』と北からの日本々土襲撃を企図してゐた所謂アメリカの対日進攻路を、機先を制して完全に撃摧し去つたのみならず、アメリカへの進攻拠点を獲得した戦略上重要意義を持つ作戦であつた。／由来日本国民の北洋に対する知識は南方に対するよりも余程少ないようだ。北洋が資源の点から従来あまり注意を惹かなかつたかと思ふが、対米関係に於て北洋の戦略的意義は、南方と少しも変わらないのである。南方のみに目を奪はれて、満洲国や樺太との関係をも考慮に入れての北方の鎮護を忘れてはならない。／鳥も通はぬ鬼界が島とも思はるゝそこに我が皇軍の精鋭たる挺身進撃部隊が、寒気と濃霧と高濤との自然の悪条件の下に、空間的・時間的困難を克服し、人烟稀薄の荒涼たる島嶼に上陸作戦を敢行し

て、いま厳然と祖国防衛の第一線に莞爾として奮闘してゐるのである。(1～2頁)

この奇襲作戦から一年弱、アッツ島は日本国民にあまり知られる地名・戦場となる。ここで、アジア・太平洋戦争における「アッツ島の戦い」について、次に引く辞典記述から確認しておく。

アリューシャン列島アッツ島をめぐる日米の攻防戦。アッツ島は、キスカ島とともにミッドウェー作戦(一九四二年六月)の陽動作戦として実施されたアリューシャン作戦によって日本軍が無血占領していたが、同島が米領であるという以外には戦略的価値は乏しかった。四三年五月十二日、米軍は米領奪回とキスカ島孤立をねらってアッツ島の三カ所に陸軍第七師団一万一千人を上陸させた。日本軍守備隊(陸軍北海守備隊第二地区隊と若干の海軍部隊)二千六百五十人は、米軍側に戦死六百人、戦傷千二百人の損害を与えたが、重砲や戦車をもたない守備隊は次第に圧迫された。大本営は当初のアッツ確保から十八日には放棄へと方針を転換し、濃霧などの悪天候にもわざわざいされて増援も撤退もなされないままで守備隊は全滅した(生存者は捕虜の二十八人)。大本営は同島の全滅をはじめ「玉砕」と発表し、守備隊長山崎保代陸軍大佐は二階級特進のうえ「軍神」とされた。[全文]<sup>3</sup>

昭和18年5月29日の日本軍守備隊全滅という戦況を、大本営は「玉砕」という表現を用いて発表、それが翌日の新聞紙面から盛んに使われていく。以後、アッツ島玉砕をモチーフとして、藤田嗣治による作戦記録画(戦争画)《アッツ島玉砕の図》(S18)や太宰治による小説「散華」(『新若人』S19.3)など、さまざまなアッツ島玉砕表象が産出されていくが、本稿では文学者を中心とした書き手による言説を検討対象とする。というのも、アッツ島玉砕とは、《文学者にとってはbその出来事／報道をどのように捉え、いかにして言語化するかという文学的課題》<sup>4</sup>でもあったのだから。

まずは、アッツ島玉砕報道直後に、ベストセラー大衆文学『宮本武蔵』(S10～14)の著者・吉川英治と、日露戦の実戦記録『肉弾』(M39)の著者・櫻井忠温が寄稿した新聞記事(『朝日新聞』S18.5.31)を参照しておこう。この記事のリード文は、次のようなものである。

アッツ島守備部隊の壮烈極まりない玉砕は、仇敵撃滅への大いなる警鐘であつた、山本元帥の戦死やアッツ島守備部隊の奮戦によつて、一億同胞はますます聖戦完遂へ血ぶるひ立ち、撃ちてし止まむの決意を弥が上にも昂めてゐる、[略]我らはいまこそ全心全力をあげて決戦の途を突き進み、勇士らの戦死の上に栄光の日章旗を輝かさねばならない(2面)

吉川英治は「アッツの死闘こそ天意の指揮力だ」で、「この際、格別にいふ言葉はない、たゞいよいよ心を打たれるものは部隊長山崎保代大佐以下の最後まで堅守奮闘あるのみで『戦ひである』といふその覚悟に尽きてゐる」と断じた上で、アッツ島玉砕の意義を次のように論じていく。

このアッツ島のことを見ることは、我々の悲涙を踏んで立つた勇壯をいよいよ猛ならしめてくれる天意の指揮刀だとも思ふ[略]我々はそれ[米軍の実質的兵法]に鑑みても、あまりに神兵の精神的奮闘のみに期してはならない[／]また国内銃後も己々の精神的奮闘のみに相よつてゐてはいけなと思ふ、精神に比例して、もつともつと、肉体の困苦と労働と、血と涙とを注いで物質率をも急激に盛り高める必要がある、いはゆる増産である(2面)

アッツ島に散った《神兵》たちの《勇壯》によって、この戦争への覚悟を新たにする吉川は、精神的奮闘にくわえ、物質的な《増産》にも力を入れるべきことを主張し、アッツ島玉砕を戦争遂行への力を加速させる《天意の指揮刀》と読みかえて、積極的に意味づけていく。櫻井忠温も「大忠孝を果せり」において、《アッツ島の勇士諸士よ、諸士は日本軍人たるの本領を發揮し、遂に全員浪荒き孤島のうへに玉砕した、諸士も軍人として満足してゐるにちがひない、大忠大孝これに及ぶものはない、国民は決して失望などはしない、勇氣は百倍する》(2面)と述べて、《勇士諸氏》の奮闘を《大忠大孝》と惜しみなく讃えながら、やはり戦争遂行への《勇氣》と読みかえていく。

もちろん、こうした新聞紙上のコメントにとどまらず、《多くの文学者たちが、アッツ島玉砕の「五月二十九日」を取材にした詩歌を残した》<sup>5</sup> のであり、その代表的な作品の一つとしてとして、高村光太郎「五月二十九日の事」(『記録』龍星閣、S19.3)がある。次に全文を引いておく。

もとより武士のあはれを知らぬ彼等の眼には／ただ日本軍全滅すとのみ映じたのだ。／皇軍二千余人悉く北洋の孤島に戦死す。／この悲愴の事実<sup>ものふ</sup>に直面して／その神の如き武人<sup>ぶじん</sup>の心にわれらは哭く。／われらは哭く、われらは哭く。／日本全国民、眼を閉ぢて哭く。／その死の事実の故のみならず、／その死を潔<sup>いさぎよ</sup>しとした二千余人の心に哭く。／清さ、高さ、ありがたさに胸が裂けるのだ。／味方に遠い敵中の離島、アッツ島、／糧食弾丸限りあり、／十倍の敵殺到して／空海陸の猛撃夜を日につぐ。／世界の通念、合理の常道を抹殺して／山崎部隊長は頑として反撃する。／二千余人のつはもの、心は心に伝へて／既に最も清らかな覚悟を定めた。／微塵の躊躇なく、毫末の逡巡もない。／つひに五月二十九日の夜半、／隊長静かに処理すべきを処理し、／全軍 聖壽の万歳をととなへ奉りをはつて／重く傷ける者病める者は悉く自決、／つづき得るもの百数十、／敵の主力に突入して奮戦激闘……／われら同胞ここに至つて口、語るに堪へない。／ただ首<sup>かうべ</sup>をたれて黙するばかりだ。／われら黙する者の胸中より迸るは何ぞ。／愕然として目ざめるものは何ぞ。／捨身邁往の勇猛心、／神明に通ずる貫徹の誓だ。／戦の一事は皇国の陸海軍盤石の如く、／一切の起伏は偏に神の御心にあり、／人意のはからひを絶つ。／百難われらに幸し、／万苦われらを鍛錬する。／銃後期せずして心たかまり、／生活、生産、戦陣を凌ぐ。／北方敵中皇軍の義烈、／美、きはまりなく、／われら哭いて心を洗ひ、／敢然としていま立ち<sup>おこな</sup>、行ふ。(122～126頁)

42行に及ぶ長さだが、それゆえもあってここではアッツ島における皇軍兵士2000余人の玉砕をめぐる、アメリカ兵の視点からの状況認識、玉砕の報を聞いた日本全国民の慟哭、玉砕直前の現地の状況や守備隊の覚悟、語り得ぬものとしての5月29日の出来事、玉砕報道を受けての銃後の誓い、戦争遂行への意志といった多くの要素が書きこまれている。これを、本稿での以後の分析にも応用可能なかたちで定式化しておけば、aアッツ島守備隊の全滅(戦死)という出来事、bアッツ島玉砕をめぐる固有名・日付(山崎部隊長、5月29日、2000余名ほか)、c銃後国民による反応(守備隊への哀悼・感謝・反省ほか)、d全滅を美化した表現(玉砕ほか)、eアッツ島および戦況の描写、f聖戦の意味づけ・戦争遂行への誓い(復讐)、といった六点にまとめることができる。

さらに、次節以降の分析の補助線として、アッツ島玉砕の表象(言語化)についてはやい段階で論じた、澁川驍「文芸時評 歴史的感動と生活」(『新潮』S18.8)をとりあげ、検討しておきたい。冒頭、「山本元帥の戦死及びアッツ島における山崎部隊の玉砕は人々に多くの感銘を与へたに違ひない」、《それに関する文章が今多くの人によつて書き綴られてゐる》ことにふれ、「小説にはまだこの

種のものを出てみないやうである》としながら、《しかし十二月八日についての作品が大分出たやうに、これから次第に多くの作家によつて書かれるであらう》(53頁)と見通しを示す。さらに興味深いのは、澁川がアツツ島玉砕からの時間経過に伴つて三段階の変化が訪れると予示し、それに応じて、《感情の表現》にも《三つの段階》を措定していることである。曰く、《最初の感動》は、《単に喜びとか、悲しみとかすぐハツキリ説明することのできない性質のもの》である。第二段階では、《その歴史的事件に対するいろいろの感想が生れ》、《これには理性が加つてくるので、その感情もかなり複雑になつてくる》。第三段階では、《この感想が集結され、一つの方向を持つところに決意が起つてくる》、《これは感想の場合よりも、行動性を意識するために、感情の緊度は強くなつてくる》(53～54頁)のだという。以下、澁川の議論を、論述の順序を整序しながら確認していく。

第一段階では、《感動の位置を究明する理性は動いていない》、それゆえ《その感情は彼の全人格の発露》(54頁)であり、アツツ島玉砕報道直後から発表された各種詩歌などが、それに該当する。ちなみに澁川は、同論の冒頭でアツツ島玉砕に関する文章のうち《一番印象深く残つた》(53頁)ものとして、(本稿でも後述する)福林正之「アツツ島回想」(『日本読書新聞』S18.6.5)と加藤楸邨「アツツ島戦報を聴く」(『新潮』S18.7)とをあげていた。

第二の《感想といふ感情の段階》をモチーフとした作品では、《想像が加り、時事の移動に対する知識が取り入れられ、現象に対する批判が行はれ、自己への反省がなされる》など、《表現に論理的展開を必要とするために》、《散文の世界において有効に生かされてくる》。ただし、《感想の形態》についても《思想的なものと生活的なもの》の二種類がある。《歴史的感動》においては《思想的な面が強くなつてくるのは当然》で、そうなる表現は近似性に囚われがちになり、《この困難を征服して、作品の効果を最大に発揮するためには、非常に多くの努力が払はなければならない》。逆に、《生活的なもの》の場合は、《感想に依拠する時作者は思想的感想の場合よりも容易に、しかも有効に、感情の表出を行ふことのできる》(54頁)のだという。双方の場合とも、《自己の生活に即して、その感情を表出することが最も必要なこと》で、《いかに情熱溢る感情を私たちが知つても、その人がいかなる生活をしてみて、いかなることを常々考へる人であるかを知らない限り実感は胸にせまつてこない》、《もし職業、境遇を異にする人たちがその生活を通して感情を表現するやうになれば最もよき歴史的感動を永久に伝へることができるに違ひない》(55頁)と注記している。

第三の《決意》(の段階)をモチーフとするに際しては、《表現が互ひに近づき合つてくるのは避けられない》ため、《この近似性を突き破り、これに特異の芸術的高さを持ち来すためには、表現の技術において、作者は競つて一段の激しい習練を積まなければならない》。ここに、《感動の直接性を把握しなければならない》にもかかわらず、《技術的練磨は時間の余裕を必要とする》という《困難》(54頁)が不可避的に生じてしまう。

以上が、澁川によるアツツ島玉砕を表象する際の、モチーフと時間経過を関数とした見通しである。本稿ではこの見通しを参考にしつつ、アツツ島玉砕をめぐる文学的言説を検討対象として、新聞・雑誌を中心にひろく調査し、先に定式化した観点 a～f を用い、韻文(2)、散文・随筆(3)、散文・創作(4)というジャンルごとに分析・考察を展開していきたい。通底する問題関心は、文学的言説の表現、その同時代的な意味作用、さらには戦争末期における文学者の社会性である。

## 2

本稿では、文学者が戦争を肯定・推進する作品を発表することが常態と化した歴史の中で、個々の文学者がアツ島玉砕というモチーフをどのように表象し、それがどのような意味作用・効果をもたらしたのかについて、事後的なイデオロギイ的裁断を排しつつ、具体的に検討していく。

本節では韻文——詩、短歌、俳句における、アツ島玉砕表象を分析していく。

齊藤茂吉「神の御軍 アツ島の忠魂に捧ぐ」(『朝日新聞』S18.6.1)は、次に引く短歌五首。

しゅび しふん げき かご  
 守備隊の死愼のつひの突撃を泣かむ涙に加護あらせたまへ  
 この島に二千ためらふことなくて神の御軍のかばねとなりぬ  
 われ等いま敵かの涯の悲しさを何にまうさむや涙ぞたぎつ  
 ひとりだに生きのこらじと打たえしすめら御軍のたましひぞこれ  
 かなしさは直に一つなる心にて今こそは嗟べわが雄たけびを(4面)

さしあたり、アツ島で玉砕した守備隊への追悼がテーマとみてよい。確かに、一首め～四首めにおいてはアツ島における突撃・死(全滅)といった出来事が、兵士の《忠魂》を弔いながら、その悲しみを《涙》で表現しつつ詠まれている[a・c]。また、五首めにおいては、その報を受けて国民が《一つなる心》へと一体化していくという、銃後の受容が詠まれている[f]。

相馬御風「アツ島の英霊に捧ぐ」(『読売新聞』S18.6.2)は、次に引く短歌三首。

日本のますらたけをのまごころを髓の髓まで示したまひぬ  
 この壮烈鬼神も哭かしむこの忠魂つひに米英を撃滅しべし  
 忠霊に報いん道は唯一つ撃ちてし止まむ撃ちてし止まむ(4面)

ここでも、一首めは全滅した守備隊の《英霊》に捧げる哀悼がテーマであるが[a・c]、二首め、三首めは玉砕をうけて、《忠魂・忠霊》に報いるために戦意高揚が強く打ちだされている[f]。

齋藤史「アツ島の英霊に捧げまつる」(『文学界』S18.7)は、次に引く短歌八首。

傷病兵自ら断ちてさきがけつ残る百余人一丸と爆づ  
 残りなくたかひ死にに死ぬ兵が仇撃て撃てと叫ぶ声きこゆ  
 一兵残らず死ぬべくよしと決めしとき眼には頭ちけむ故郷の山河  
 ますら夫が血潮染みたる島の雪の永久に消ゆると我が思はなくに  
 故国に寄する思ひの如何なりし十八日を堪へ戦ひつ  
 ますら夫の道をゆきたるたふとと言へど尽きせぬうらみあるなり  
 口惜しきみたまの憤り国民のすべてにうつり勝たざらめや  
 魂に彫りこれの思ひを我ら継ぎ撃つべき力炎と燃さむ(12～13頁)

ここでも、アツ島で玉砕した《英霊》[d]への追悼がテーマである。一首めから五首めまでは、玉砕に先立つ傷病兵の自死から18日に及んだ戦闘、全滅までが、個別の局面に即して歌われている[a・e]。ただし、三首めや五首めに特徴的なように、兵士の内面が《故郷・故国》へと結びつけ

て詠まれており、こうした媒介をへて、六首めから八首めにかけては、《国民》、《我ら》とやはり銃後の反応が詠まれ、《うらみ》、《憤り》、《撃つべき》という明確な感情へと接続されていく〔f〕。

《不滅の偉勲を遺して南海の空に散華した山本連合艦隊司令長官と、御稜威の下に武人の覚悟をかくこそと潔く玉砕し去つたアツツ島守備の勇士と、耿々たる士気は炳として一億の行手を照すものでなければならぬ》(56頁)と無署名「編輯後記」に記された同誌同号には、黒江太郎「嗚呼アツツ島」(『短歌研究』S18.7)が掲載されており、こちらには次に引く短歌四首が掲載された。

ますらをのこの君にして部下ありき涯の島に名をしとどむる  
 かつてなく沁む<sup>がく</sup>楽の音よますらをは玉と砕けてかへりみはせじ  
 北海の遠の御楯とさもらひしみ魂は鎮む大君の辺に  
 あたたかき夕餉を食して涙むせぶわれに妻子も寄りて嘆けり(3頁)

ここでのテーマは、タイトルの《嗚呼》という嘆声に託された、アツツ島で玉砕した《ますらを》(日本軍守備隊)への、歌人 - 銃後国民による哀悼だろう。一首めから三首めまでは、《島》、《北海》といったレベルの描写〔a・e〕から、戦死のさまが《玉と砕けて》、《御楯》〔d〕と崇高なものとして詠いあげられている。それが四首めになると、一挙に銃後の食卓で家族三人がその報をうけて《涙》にむせびながら嘆く様子が詠われる。こうして、ささやかな一家庭におけるアツツ島玉砕(報道)受容が、国民全体の嘆きの一場面として共感を誘い得るかたちで描かれていく〔c・f〕。

前掲歌とタイトルの重なる齊藤茂吉「アツツ島の忠魂」(『飛行日本』S18.7)は、次の短歌三首。

あきらかにやまとだましひはかくのみとアツツの島に果てにけるはや  
 神代より今のうつつに<sup>つた</sup>伝へたるやまともものふの忠死のさまぞ  
 尽忠の血しほをつひにとどめたる北のひとつ島永久におもはむ(25頁)

日本民族の歴史的継続性を強調した三首だが、一首め、二首めでは具体的な描写よりも、死それ自身がフォーカスされ、兵士の《忠死》が讃えられ〔a・c〕、三首めではそうした死が、銃後においてアツツ島を戦跡として記憶することを通して、この戦争の遂行がひそかに誓われていく〔f〕。

大賀知周「アツツ島の忠魂を哭す」(『公論』S18.7)は、次の短歌三首。

ますらをの行くべき道を北の海原の小島にきはめ給ひぬ  
 み怒は地にみちしきて草むさず嵐とたけり天翔けります  
 荒しほの八重の潮路ゆとよみ来る益荒猛男のをたけびに泣く(3頁)

ここでも鍵語となりつつある《忠魂》という表現を用いながら、いずれもアツツ島守備隊の偉業を、事後的な時間軸から讃え〔a〕、その行為を知った銃後での受容の様相が詠まれている〔c〕。

加藤楸邨「アツツ島戦報を聴く」(『新潮』S18.7)は、次の俳句五句。

声のむや楓をつらぬくつばくらめ  
 一步に禱り二歩に忿りや桐の花  
 答なし百合の花粉ははなびらに

明け易き片照り雲のうごくかな  
北の涯のその霧の夜につづく梅雨(25頁)

用いられた個々の言葉の多くは平易であるにもかかわらず、全体として動植物のいる風景が切りとられた心象がモチーフとされており、タイトル「アツ島戦報を聴く」とあわせてはじめて意味が明瞭になる。いずれも、アツ島玉砕報道を内地にて聞いた際の銃後の反応[c]である。なお、五句めには《北の涯》とあり、アツ島への想像に即して現地の描写[e]もみられる。

神保光太郎「歴史——アツの英霊に捧ぐ——」(『文藝』S18.7)は、次のような詩である。

太郎よ／あの峠に行かう／／群<sup>むれ</sup>なす霧をわけて／あの不思議なお花<sup>はたけ</sup>畠<sup>あた</sup>の<sup>きぎく</sup>辺り<sup>しらぎく</sup>へ／黄菊 白菊  
／この北の島／寂寥の奥に咲く伝説の花／あれが山崎の丘／その昔／父が太郎のとしごろ／  
さうだ／大東亜のあけぼのの日だ／／あそこで／二千数百のつはものが／幾万の敵<sup>むか</sup>を迎へて戦  
つたのだ／いま／その敵<sup>ほろ</sup>涙びてない／／あの丘の石の御柱<sup>いし</sup>／漂々たる／ベーリング海<sup>みほしら</sup>の／潮風<sup>かい</sup>  
に吹かれて／丹<sup>に</sup>の魂<sup>たま</sup>の歴史を語る／／太郎よ／あの峠に行かう(41頁)

ここで《あの峠》とは、アツ島守備隊が全滅した雀ヶ丘(Engineer Hill)を指すのだろうか。月刊誌の制作過程・発表時期から考えれば、アツ島玉砕報道からまもなく書かれたと思われるが、具体的な風景・戦闘描写を交えながら、すでに《あの峠》を歴史(の痕跡)と捉えて《大東亜のあけぼのの日》と称しており、文字通りアツ島玉砕を歴史化＝神話化すべく意味づけている。従って、副題に掲げられた英霊への哀悼の意を表すこととあわせて、歴史化しようとする言語行為自体がこの詩のテーマだといえる[a・b・d・e・f]。従って、太郎への呼びかけ構造をもつ詩全体が、銃後の国民の反応であり、同時に、国民の共感を誘う仕掛けということにもなるだろう[c]。

「アツ島の神々」(『新潮』S18.10)には、次の六歌人による短歌一八首が掲載された。

前田夕暮

通信断絶寸前にしてまつぶさに報告なしましき澄みあきらけく  
建御雷<sup>すえ</sup>の神の裔<sup>をたけ</sup>なれや雄詰<sup>あだ</sup>びて敵撃ちましき二千余柱の神々  
新月<sup>にひつき</sup>の光さやけし完全玉砕なしおほせたる荒御魂はも(6頁)

前田はアツ島における当時の戦況を再現するようにして《二千余柱》、《玉砕》といった表現を用いて、全滅した守備隊を《建御雷》、《神々》、《荒御魂》と称して言祝いでいく[a・b・d・e]。

前川佐美雄

益良雄<sup>うみやま</sup>のつひの雄たけび伝へねど国民<sup>くにたみ</sup>なればみなわかるかも  
海山のあひだに生きてはらからをいたむ嘆きも今日にきはまる  
み国しづめの神とはふぐもその神の心をつがひ撃ちてしままむ(6頁)

前川はアツ島守備隊全滅については直接的には書かずに、それに関する銃後における玉砕報道の《国民》-《はらから》という共同性における受容をモチーフとしている[c]。さらには、その《嘆き》を、復讐よろしく《撃ちてしままむ》という、この戦争遂行への戦意へと転じていく[f]。

松田常憲

我等にぞ御言たまへるかしこさやさきがけて死なむ今日のよき日に  
待ち待ちし今日のごよひの今となりて心にさやるかげだにもなし  
世をあげてみまもる中にもものふのかくて栄ある死様はせむ(6頁)

松田は、アツ島や戦場を具体的に描写することなく守備隊の死(《死様》)にフォーカスを絞って、それを讃える銃後の《我等》、《世》とあわせて、玉砕を《栄》と価値づけている[a・c]。

今井邦子

将兵二千玉と砕けて散りはてぬ砕け散るまで決意迫りし  
或る兵の出生の時銀座なる菊秀にて買ひ求めしナイフをかざして敵に向ひたりと  
聞く、深く胸打たるゝものあり  
敵陣にナイフをかざし斬りこみしとその兵の母は東京に在り  
国柄、信念の差は大也アツ島勇士の名は永遠に残るべし  
伊太利亜はもろく降りぬアツ島にて我將兵はみな死ににけり(7頁)

今井は、三首とも《玉砕》や《死》という表現を用いて、アツ島守備隊の戦死を称揚していく[a・d]。なお、二首めで個別具体的な《或る兵》のエピソードをとりいれて前線と銃後を媒介し[c]、あるいは三首めでイタリアと比較して日本(兵)を称揚するなど、特異な表現が目立つ。

谷 馨

なほ生きて敵にし迫る兵ありと今宵のラヂオ言ひ出ぬものか  
終の勝われらにたのみ果てし霊おもふのみにも撃ちてしまむ  
語り継ぎ御霊の遺志を無みせむや語るに照らむ皇国の道(7頁)

谷はアツ島守備隊の生存者を望むことで、逆説的に全滅の峻厳な事実を示しつつ、その《御霊の遺志》によりそうことで、《撃ちてしまむ》という戦意高揚へと接続していく[a・c・f]。

岡野直七郎

敵兵を憎み怒りし極まりに死せむいのち水のごと冴ゆ  
大君の任したまへば島の守備死もて遂げまくたのしも今は  
祖国の行手おもへば弥栄にかがやきて見ゆいざ突き入らな(7頁)

岡野はアツ島守備隊の死を《敵兵》、《大君》、《祖国》といった要素との相関関係のうちに詠みながら、その瞬間的な《死》を崇高なもの(《弥栄》)として意味づけている[a・c・f]。

くわえて同月には、『三田文学』が「愛国詩特輯」を組んでおり、ここにはアツ島玉砕をモチーフとした作品として、次に引く佐藤春夫と尾崎喜八の詩が発表されている。

佐藤春夫「あつ島玉砕部隊讃仰歌」(『三田文学』S18.10)は、次のような22行の詩である。

日の本のますらたけ男の／まごころのきびしき道を／貫きて命ををしく／悠久の大義に生くと

つはもの<sup>を</sup>し  
 / 将兵を訓へはげまし / わななける北斗のしたに / 咲きいでしあつつざくらを / 朱にそめ口ま  
 さっかる山の / 戦<sup>たたかひ</sup>に率<sup>ひき</sup>るともなひ / 撃ち撃ちてもろともに / 玉と砕けてさきかをり / つんど  
 らに時じくの梅 / 日の本にもものふありき / 部隊長山崎保代 / この君がその<sup>こころざし</sup>志<sup>い</sup>勲<sup>くさ</sup>を / 軍の  
 かみ<sup>かみ</sup>と見そなはし / 魔<sup>す</sup>の住み家なす北洋の / 永久の鎮めとなし給ふ / わが大君<sup>かし</sup>の畏くもあるか /  
 おほきみ<sup>おほ</sup> / 大君の大きめぐみに / ふるひ立ち勇める君ぞ / 神にまします (2~3頁)

佐藤はアツツ島の風景を描きながら、山崎部隊長をはじめとする守備隊の玉砕を、《大君》の反復によってひたすらに《鑽仰》していく[a・b・d・e]。逆に、銃後国民の反応や、それに伴う戦意高揚などには言葉を費やさず、そのことによって守備隊を崇高な存在へと価値づけていく。

もう一篇、尾崎喜八「英霊に祈る」(『三田文学』S18.10)は、次のような27行の詩である。

ベーリングの氷の海、雨濛々、霧漠々、 / 花もなく慰めもない孤島アツツに / 北門の守護に任  
 ずる実に一年、 / 衆をたのみ装備を誇る敵二万を迎へ撃ち、 / 寡勢よく六千の醜虜を斃して闘  
 魂烈烈、 / つひに男子の事終るや全軍突撃玉と砕けた / かの山崎部隊長以下勇士二千幾百の、  
 / 不滅の忠魂、不朽の武勲を今におもふ。 / この事あつて敵胆寒く、 / 我に北方本土の固め  
 着々と成り、 / その加護あつてキスカの撤収全きを得た。 / ここに一億あらためて頭を垂れ、  
 / 敬弔感謝の赤誠をささげまつる。 / 敵最早われを侮らず、 / 邪まなる怨恨に燃え、非望に  
 鞭うち、 / 万策をつくし、総力を傾けて、 / わが東亜保全の大圏を破り、 / 神聖なる国土を窺  
 はんとする。 / 皇国興廢の分るところ、 / 東亜命運の定まるところ、 / 曠古の決戦刻々とし  
 て眼前にせまる。 / 我等最早前線銃後をいはず、 / ただ身命をつくして敵に当らんのみ。 / 最  
 後の突撃に臨んでアツツの勇士 / 聖壽万歳を唱へた声耳にあるの心地がする。 / ねがはくば忠  
 烈の魂魄我等を導いて、 / 此の曠古の決戦に立ち向はせたまへ。(4~5頁)

尾崎は、アツツ島の自然をていねいに描きながら、苦しい戦局をへた後の5月29日の2000余名の玉砕を《武勲》とたたえ、そのことがもたらした戦果にまでふれながら、《前線銃後》の一体感の高まりを《東亜命運》、《決戦》という表現で戦意高揚へと接続していく[a~f]。

もう二篇、『東洋の満月』の詩人による「アツツ島の英霊に誓ふ」、「湿原の忠霊」(いずれも、蔵原伸二郎『旗 詩集』金星堂、S19.3)も検討しておこう。次に引く通り、いずれも長大な詩である。

寒気骨をぬぐる / 不毛の島、北方の絶域、アツツ島! / 蒼黒き草原、霧深き天なり / 遠山の雪  
 溪のみ不気味に光り / 冷風常に烈しく旗を鳴らすあたり / 白夜と薄暮の世界 / 単調と荒涼のこ  
 の湿原地帯にありて / われらの勇士はまさに一歳 / 敵機の来襲とたたかひ / 悪疫、孤独とたた  
 かひ / ただただ悠久の大義に生き給へり。 / 大君のため、同胞のため、 / まこと言語に絶する  
 艱苦に耐へ給へり、 / はるけくもわれらを守り給ひしなり。 / 昭和十八年五月二十九日、この  
 日ぞ! / 一億の同胞よ、よもこの日を忘れまじ! / 至尊の兵二千数百の全勇士 / 今にははや / 呼  
 べども答へたまはず / 叫べども応へたまはず / 雄魂とこしへに絶海の湿原に留り給ふ。 / われ  
 ら皇国に安眠するもの / 何の顔あつてか / おめおめ生くるを欲せんや。 / 然り、 / 尊き幾多の  
 屍を乗り越え踏み越え / ただ一路 / 英霊の指さし給ふ彼方へ進軍せんのみ。 / 悲憤と復仇を飯  
 の一粒一粒に / かみしめ かみしめ のみ下し / われら必ず撃つ! 必ず撃つ! / 親潮と黒潮  
 の渦巻き荒れ狂ふ / 北洋の孤島アツツに残り給ふ英霊達よ。 / 今しばし、ただいまひとときな

り、／われらが一大進撃の日を待ち給へかし。(13～16頁)

黄花岗の暮色に沈むあたり／呼べども 呼べども はや／勇士らは応へず／われらの旗は鳴らず／風啾々として灰色の湿原を渉る／極北の地方！／流氷岩を嚙み／地衣類のみ徒らに島を埋むるところ／濃霧は海を蔽いひて来り／また山を奪ひて去る／陽はつねに暗しといへども／なほ永劫の時間を貫き生きるもの有り。／風にあらず／霧にあらず／正気なり／忠義の真なり／これぞ天地をして慟哭せしむるもの／万古に不易なるもの／絶対に消滅せざるもの／すなはち／二千数百の烈々たる忠魂にあらずや／草莽報国の志にあらずや／ああ、いま北溟の海に火花と発して光る。／されば同胞よ、忘ることなからん！／勇士らの骨は未だ拾はれずあるを！／悲はよろしく千倍の復仇の後になすべし／怒はよろしく冷徹なる刃の先端に集結すべし／一億の臣民みな死してのち止む！(17～19頁)

前者「アッツ島の英霊に誓ふ」はアッツ島のていねいな描写を詠みこみながら、戦局をたどった上で、5月29日の偉業を果たした守備隊を《英霊》と呼んでは、《悲憤と復仇》を誓っていく〔a～f〕。後者「湿原の忠霊」にも、アッツ島の描写は顕著だが、ことはすでに終わり玉砕は空白とされており、《忠霊》を讃えながら、国民の一体感を《復仇》に向けて喚起していく〔b～f〕。

以上、ここまで検討してきた一八の韻文作品においては、ジャンルや書き手の差異をこえた表現上の類似が顕著である。アッツ島玉砕というモチーフが同一であり、それ自体のはらむ崇高さ、出来事性がこうした類似を招く一端ではあろうが、表現上の配慮は当然として、文学者がこのモチーフをとりあげる動機が近似していたことも要因だろう。戦争詩一般が、国民の共感を誘いながら戦意高揚へと導く作用をもっていたように、ここでとりあげた韻文作品もその例にもれない。実際、分量の長短に関わらず、韻文作品において観点 a・c の要素がそれぞれの核であったことがその証左である。つまり、アッツ島守備隊の玉砕を厳粛に受けとめ、英霊を《一億の同胞》とともに讃え、銃後の国民生活を再認識(反省)する、というのが最大公約数といえよう。また、報道ずみの情報である a・b については省筆されることも多く、こと《玉砕》という表現は思いのほか使用頻度が低かった。むしろそうした空白を読者が埋めることも含めて、アッツ島玉砕をモチーフとした韻文作品は、銃後国民の共感(加速)装置として作用することが企図され、実際そのように受容されたと思われる。これは、同時に文学者の社会性 - 存在意義の保証ともなる。

### 3

本節では、随筆などの散文において、アッツ島玉砕がどのように表象されたか、検討していく。

最初期の文章として当時から好評を博したのは、福林正之「アッツ島回想 眼底に浮ぶ神兵玉砕の孤島」(『日本読書新聞』S18.6.5)である。アッツ島玉砕は、北方のアッツ島が広く知られていなかったことにくわえ、守備隊が全滅したがゆえに、文字通りの意味で表象不可能なモチーフである。アッツ島来訪体験をもつ福林は、報道にふれて《一語々々をきいてあるうちに、私の胸のうちには、アッツ島のあの荒涼たる風貌がまざ／＼と浮んで来た》として、次のように回想 - 想像する。

岸を臨むベーリング海の波濤、動んだ岩肌、樹木一本なき枯草の丘陵、霧の光る山々、それらを渡る冷たい風、霧一私にとっては既に十年の昔に焼きつけられた映像ではあるが、それがい

ま実に鮮明によみがへつて来るのである。／そして最後に『守備隊将兵はその最後の攻撃決行前において遙かに皇居を拝して／大元帥陛下の万歳を奉唱し…』といふ言葉に来た時、私は遂に号泣したのである。何故ならば私はその時の光景をまぎ／＼と見たからである。いや、見たのではない、見えたのである。

《回想と想像とが重なり合つてそこに一つの現実が生れた》という福林は、《五月二十九日の夜、黙々として丘の上に集結した百数十名の勇士達は、やはり私が見たと同じ海潮の光り、私が嗅いだと同じ祖国への距離感を感じながら恐らくは何もいはず黙つて敵の中へ突込んで行つたのではないか》(1面)として、表象＝再現不可能なその瞬間を幻視し、言語化していくのだ[a・c・d・e]。

その後、7月号以降の雑誌には、アツツ島玉砕をモチーフとした文章が並ぶ。

《アツツ島に神州の靈気煥発す。文字通り一億国民は電撃の如く打たれた》(10頁)と言表する志村陸城は「アツツ島の英魂を悼む」(『公論』S18.7)において、《アツツ島の英魂亦永遠の今日つねにたゞ北辺の孤島に深く首を垂れて拝めば足る》として、ただその《一瞬》(11頁)への讚美のみを求め、同時にこの出来事を文学化を戒める。余計な意味づけを排す志村は、《想ふにアツツ島の英魂は戦ひに生き、戦に死して逝つたことであらう。死に徹し戦に徹して逝かれたことであらう》と戦場での極限状態を注視し、《そこに現ざる荘嚴なる世界を想見する》(13頁)[a～d]。同様の感懐は、櫻井忠温「死して勝てり アツツ島の玉砕勇士を偲びて」(『飛行日本』S18.7)にもみられる。《アツツ島のことは、一大悲劇であつたが、また一大活劇でもあつた》とみる櫻井も、《楠公は「十死あつて一生なし」といつたが、アツツ島の勇士こそ十死あつて一生もなかつた》として、《二千余人悉く大義に生きてゐる》、《十死して十生を得た》、《死して死せず、永久に戦線の人の上に生き、国民の上に生きてゐる》(24頁)と捉え、その生＝死の瞬間を讃える[a～d]。

ただし、アツツ島玉砕をめぐる散文は、そのエッセンスを射貫く言表ばかりでなく、すでに韻文を検討した前節での議論からも類推される通り、より多くの意味を体現し、生じさせていく。

その第一は、玉砕を成し遂げた守備隊への感謝、讃仰と、それゆえの内地の生活への反省である。

窪川稲子は「勇士の心を私たちの胸に」(『同盟グラフ』S18.7.7)において、《山崎部隊長以下二千有余のアツツ島の勇士たちの遺家族に、心からの御慰問の想ひを胸にいだいてみよう》と述べて、《遺家族》にスポットを当て、《まだまだ自分たちの毎日の生やさしさが振りかへられるのではなからうか》(25頁)と、守備隊に比した内地の生活への反省を促している[a・b・c]。吉田絃二郎も「アツツ島の英魂に誓ふ」(『婦人倶楽部』S18.8)で、《内地のわたくしたちが敵の空襲を受けることなく静穏な生活をしてみた際、明かるい太陽の光りを浴びて、或ひは万葉の桜に世界無比の日本の春を満喫してみたをり、アツツ島の勇士たちは、鉄のごとく氷つた一片のツンドラを手にしては、わづかに故国の春を偲びつゝあつたであらう》(15頁)と、アツツ島の戦場／内地の静穏な生活を対比しながら反省していく。さらに吉田は、《限りある弾薬、限りある武器、限りある兵力を以て、しかも無限の兵力と無限の武力をほこる敵に対し、故国を去つて三千幾百キロの孤島に、北門の守護神となつて、玉砕せし山崎部隊の勇士たちを想ふ時、わたくしたちは讀ふべき言葉を知らないとともに、感謝すべき、詫ぶべき辞を見出すこともできない》(15～16頁)とつづける[a～e]。いづれも、自身の反省であると同時に、銃後の国民へのメッセージともなっている。

第二に、こうした反省を内面化＝言表する文学者の一方で、アツツ島玉砕を戦争遂行の動機づけへと接続していく言表も少なくない。「麦と兵隊」以来、戦争文学の雄として活躍してきた火野葦平は「アツツ島に祈る」(『戦列の言葉』二見書房、S18.12)において、次のように言表している。

アッツ島における壮烈なる玉砕は、まことに、字のごとく、玉と砕けて、その燦然たる破片のひとつひとつは、しつかりと日本人の脳裏の壁ふかく食ひいつた。諸士の奮闘は孤島にけつして死すことはない。われわれの胸奥ふかく、いよいよ敵撃砕の決意は、諸士の精根をつくしに行動によつて堅められた。颯風と、氷雪と霧海とのただなかに、諸士の英魂は永遠にかがやきのこり、祖国の勝利の日の光となるべきことを、われわれは百拝して誓ふものである。(255～256頁)

こうして守備隊の《奮闘》を《敵撃砕の決意》へと展開していく火野は、《われわれ》という表現を繰り返して日本人の一体化をも促しながら、次のようにして文章を締めくくっている。

われわれは幾多の戦場に多くの神を持つた。いままた、北方僻遠の孤島に仰ぎみる神々を生んだ。その表情は莞爾として、われわれの進むべき道のみちびくがごとくである。いま、われわれはことごとく北を向け。われわれの脳裏には、恐怖にうちをのきふるへてゐる醜怪の米英が眼に見るごとくである。(七月一日)(256頁)[a～f]

同様に、政治家の穂積七郎も「アッツの将士に応へて一億の総突撃を誓ふ」(『中央公論』S18.7)というタイトル通り、次のようにアッツ島玉砕という行為の《感動》を《奮起》へとすりかえていく。

山本司令長官の戦死を、山崎部隊の玉砕を、今日、もちろん国民たるもの誰一人としてこの大感激をもつて、肅正、奮起の警鐘たらしめざるものとは、断じて、ありえようはずはない。しかし、さらに要請さるべきは、全体生命との関連における肚の底の底からの衝動であり、生活の根柢から奮ひ起されたる飽くなき闘魂でなければならない。(85頁)[a・b・c・d・f]

同誌同号の無署名「後記」においても、《遙か北辰直下、アッツの孤島に、山崎部隊二千数百勇士の玉砕を聴く!》、《悠久の大義に帰一せる忠勇は、正に鬼神をも泣かしむ》という衝撃につづき、《鬼畜米英を殲滅せんのみ! この一念を胸底に刻み込んで、ただに聖戦を戦ひぬかんのみ》(136頁)と、アッツ島玉砕をうけて《仇敵》の《殲滅》に向けた《聖戦》遂行が、改めて誓われていく[a・c・d・f]。陸軍中將の中井良太郎は「アッツ島の忠魂に」(『改造』S18.7)において、《筆舌に尽し難き感激とは真に山崎部隊将兵各位に対するわたくしの感激である》(52頁)と、出来事のみならず、それに対する表象困難なほどの《感激》を覚えながら、《其の意中必ずや七生滅敵を誓ひ、同胞に対しては仇討を以て最高の供養として呉れとの無言の遺言もあつたであらう》といった解釈を示していく。ここからさらに、《どうすれば仇討の準備が完成するだらうか》と論を進める中井は、《第一は今後如何なる難苦に遭遇しやうとも聊かも挫けぬこと》、《第二には万難を排して増産すること》、《第三には思想戦に負けないこと》(53頁)だと具体的な要点をあげ、《一難毎に益々戦意を昂揚堅固にせねばならぬ》(54頁)として、明確な目的意識のもとに戦意高揚を謳っていく[a・b・c・f]。ただし、中井の議論には、次のような冷静な指摘があつたことも付言しておく。

唯わたくしはアッツ島の我が守備部隊は二千数百と砲若干門なるに対し、敵は之に十倍し然も科学装備を為し優勢なる艦船飛行機を以て来攻した旨の発表を見、そして最後の結果を聞いたとき、戦争も戦闘も其の最大要素は精神力であることはアッツの防戦に依り益々立証せらるる

が、今後は物心一如に益々戦力を増強することが必要であると直感した。(56頁)

精神論への傾きが全体的な特徴でもあるアツツ島玉砕言説の中であって、既出の吉川英治と上の中井のみが、アツツ島の戦況に即してアメリカに比した物質不足に論及し、増産を主張していた。

第三に、こうしたアツツ島玉砕をうけて攻撃的になる言表とは正反対に、また、銃後生活への反省一般とも異なり、自らの職業的立場に即して内省を深めていく言説もみられた。それは、本稿の主題とも直接関わる、アツツ島玉砕以後における文学者の存在理由という難問でもある〔新たな観点＝g〕。無署名「新作家七月号」(『新作家』S18.7)では、《山本元帥の戦死に引続いてアツツ島守備隊の悲愴な玉砕はわれわれ同胞に開戦以来の大きな衝撃をあたへたといつても過言ではない》という、常套句と化した受容につづき、《このやうな未曾有の時代に際会して、われわれ文学者は一体どうしたならばよいのか、といふことをあらためて考へさせられる》として、問い自体が再帰的に文学者へと折り返され、実際行動と文学者の存在理由を対比しつつ、次のように決意が語られる。

文学者は文学をもつてご奉公申上げるべきなのだ、と自分自身にいひきかせてきたわれわれも、心は千千に砕けて手ぬるい我らの文学にやるかたない焦燥をおぼえるばかりである〔略〕豊かにも香りたかい文学の灯は国民の情趣の泉であれば、戦時下と雖もこれをたやすべきでない。み燈をままれ、これわれわれ文学者の切なる願ひであり、もし文学の灯のたえることもあらば玉砕し、自決して相果てねばならぬ。(2頁)[a・b・c・d・g]

また、砂原彪は「盾の両面について——文芸時評——」(『文藝新潮』S18.7)の冒頭で、《五月二十一日大本營発表による山本連合艦隊司令長官の莊嚴なる戦死。ついで同三十日発表の、アツツ島における山崎部隊将兵の凜烈極まりなき玉砕》と直近の戦局報道にふれながら、《もはやわれわれは、戦線と銃後との距離を考ふるときではない》、《職業の如何を問はず、すべての国民が、この聖戦を勝ち抜くために、没我協力の精神に生きねばならない》と、前線と銃後を近接させながら、《作家にしても、今日のごとき激しい時代に直面してゐる以上、自己の全能力を挙げて、この戦争を貫徹せしむべく力めねばならない》、《多面的な総力戦の一面を構成する思想戦の分野において、今日の作家は飽くまでも身を挺すべきであり、さうしてこそ、国民の一人として真に正しく生きることが可能》だと論じていく。ただし、一定以上の発言力をもたない文学者は、《併しながら、それは如何なる方法をもつてなさるべきだらうか?》(85頁)と困惑せざるを得ない[a・b・c・f・g]。

逆に、発言力・影響力をもった文学者としては、尾崎士郎が「一文学者の言葉 アツツ島死士の霊を弔ふ」(『新潮』S18.7)を書き、《アツツ島で仆れたわれ等の同胞の中には文学者もみれば政治家もある》、《彼等は国家の難に赴くことにおいて武士道の精華たるべくおのれを鍛へあげたのである》と讃仰しながら、《おそらく最後の瞬間において、敵陣に斬り込む勇士の心は水を打つたやうなしづけさにみだされてみたであらう》と、死に向かう心境を想像する。その上で、《アツツ島勇士につづけといふのは死士の感情を味へといふ意味ではないのだ》と釘を刺す尾崎は、《死士の精神を生かすことは国民各自が国民たるべき義務を自覚するとともに、義務を超越した使命に徹すること》だとした上で、《文学者が、国民感情を純化し、士気を鼓舞することに勇躍するところなしとすれば、下賤妓夫の徒と何の異るところがあらうか》(9頁)と文学者への要求を明示していく[a・c・g]。

やや毛色の異なった発言としては、横光利一「アツツ島を憶ふ」(『改造』S18.7)が示唆的である。《南の海に戦果が拡がるにつれ、その方に人々の瞳の向いたことは自然であつたが、その盛事の中

に、北を守る人々の姿が口数少くときどき見えたのは、私に忍苦の仕へどころの重さがここにも忍んであるやうに思はれ、襟をひき締めるのが習ひであつた」と、当時の北方／南方への国民の関心を振り返った上で、《五月の下旬になつて、果然、南方に集つた人々の視線が北に転じた》こと、さらには《三十一日の朝起きて新聞を眼にすると、アッツ島には、私らの関心を集めてみた人々が、もうこの世に一人もゐない有様が載つてゐた》ことにふれて、次のようにつづけていく。

見事な戦闘の結果だと分つても、そこだけ急に支へのなくなつた一点となつて、鋭く寒風が吹き襲つて来るのを覚えた。文字通りの玉砕といふべき果敢壮烈な死であればこそ、日ごろ黙黙として私らを励ました、静肅な日の忍苦が一層強く胸を突いた。新聞の報道の簡略さがまた、凄愴な最後の叫びの消えゆくさまを言外に伝へ、余韻を残して思ひを深めるばかりであつた。(58頁)

《誰かその場に生き残つたものの伝えて来る報道の多い中に、この度のものだけは、誰も見たもののない》と、アッツ島玉砕の表象不可能性を正しく指摘する横光は、《ただ私らは追ふばかりの想像より出来ないが、しかし、それでも私らの頭に浮ぶどのやうなことも、みな荘厳森厳な美しさに見えることが、想像を絶したこの戦闘の明朗凄絶な姿》だと想像しながら、《これを日本的性格の象徴性ともいふべきか、ただ今は私は言葉を惜しみたいばかり》(58～59頁)だという。さらに、既出の福林の一文について《活き活きと私にこの島の光線を知らしてくれた殆ど唯一のもの》(59頁)だと絶賛しながら、《アッツ島に散華した戦士の内地に於ける日常の生活は、どんなであつたかと思ふことは、愚かなことかもしれない私らの歩く街路で擦れ違つた人々の中にも、あるひは混つてゐたかもしれない人々の姿であつただろう。しかし、それらはただ単なる人と思ひ得られることが、今は私には喜ばしい》(60頁)と、生前のアッツ島守備隊との邂逅を想像しては、国民としての一体感に喜びを隠さない[a・b・c・d]。もう1つ、保田與重郎「玉砕の精神」(『通信協会雑誌』S18.10)にふれて、本節を締めくくりたい。《アッツ島の如きは、思想の戦つた戦ひ》だと捉える保田は、《アッツのことに対する国民的印象は、一言にして申せぬものがあつた》と認めながらも、《それについて一喜一憂したのは、戦況発表過程の現象であつて、玉砕の後の印象は、これを一言には申せぬ》という。《通常の敗れたといふ印象》とも《単なる敵愾心》でもなく、《つまり悲劇としての印象でなく、崇高としての印象》だと断じる。さらに、《玉砕といふもののもつ創造性と積極性が、神のものとして了知せられる》、《はるかに異常な靈的な印象》と崇高なものとして価値づけながら、この《国民性こそ、聖戦を直進する根柢力》だと捉え、《我々の深い聖戦奉行の情を、一段と深い根柢に収めて、改めて敵国に対したい》(12頁)、《けだしアッツの人々の、玉砕の瞬間にあらはれた神意は、近代の戦争の常識を超越して、神州不滅の道を貫くものであつたにちがひない》(13頁)と言を重ね、アッツ島玉砕を神がかつた国民性の顕現として、物質的な現実をこえたレベルにアッツ島玉砕という出来事を位置づけ、日本の聖戦を肯定していく[a・c・d・f]。

以上を総じて、散文・随筆におけるアッツ島玉砕表象においては、韻文のような直接的な感動よりも、散文としての分量を使いながら、アッツ島の描写や戦局の展開、銃後の受容について、書き手の興味関心やメッセージが示された言表が大勢を占めていた。観点でいうとa～cが大半の言表にみられ、具体的にアッツ島玉砕という出来事をたどりなおしながら、どのような感情を抱くべきか、方向性が示されていく。こと、fにふれる際には、敵の姿を具体的に書く姿勢が明らかであり、アッツ島玉砕を契機として国民を一体化させ、感情の集約が促されていった。また、アッツ島

玉砕表象が観点 g を言明する契機となっていたことも、韻文にはみられなかった特徴だといえる。

#### 4

本節では、アッツ島玉砕表象のうち、創作として書かれた散文について検討していく。

管見の限りでは、第一に書き手が直接アッツ島守備隊ではないにせよ、現地報告という体裁をとったもの、第二にアッツ島の戦いを再現する体裁をとったもの、の二種に大別できる。

第一に、『第二の人生』(河出書房、S15-16)の作者にして、従軍先のフィリピンで戦死した里村欣三(本名・前川二享)の創作二編がある。里村欣三「北千島にて」(『中央公論』S18.11)では、北千島を訪れた書き手の《私》が直接伝聞したアッツ島の《英霊》が、次のように書かれる。

撤収艦隊は、アッツ島の沖合を遙かに通過する時、速力を落して英霊に袂別した。甲板上に整列して黙祷を捧げてみたキスカ部隊の将兵は、その眼ではつきり見たといふ。アッツ部隊の勇士が日の丸を振りつゝ、小さな舟艇を漕いで出迎へてくれる姿を！そしてその耳では、万歳を叫ぶ英霊のみ声をはつきり聞いたと言つてゐる。／しかし、その刹那には、彼等はそんな風には信じなかつた。アッツ島を皇軍が再び奪還したのだと考へ、アッツへ友軍が上陸してゐるのに何故自分たちの部隊がキスカを撤収するのか、その理由がよく飲み込めなかつたらしい。だが、北方の基地へかへつてから、アッツには皇軍が上陸してゐないことを聞かされて、はじめて英霊の奇蹟を信ずるやうになつたのである。(122頁)[a・c・d・e]

こうして表象不可能なはずのアッツ島玉砕について、《その奇蹟を信じる》と言明する《私》は、《アッツ部隊の玉砕後、キスカでは誰一人として生還を考へてゐなかつた》にもかかわらず、《突然に優渥なる大命をいたゞいて、それこそ一兵も損せず、撤収作戦の見事な成功を見た》がゆえに、《キスカ部隊の将兵にとつては、どのやうな事実もすべて天佑神助と英霊の加護としか考へられなかつたであらう》(122～123頁)として、アッツ島守備隊による《英霊の加護》が確信されていく。

もう一編、里村欣三「アッツ島挿話」(『現代』S19.3)もとりあげておく。ここでも、直接的には表象不可能なアッツ島守備隊について、太宰治「散華」同様<sup>6</sup>に、生前に書かれた手紙が中心に据えられている。《北千島の前線基地へ工兵部隊を訪ねたのは、アッツ部隊の玉砕から約四ヶ月を経過してゐた》(84頁)という書き手の《私》は、出発前の《八月二十九日、山崎軍神部隊の玉砕者の氏名が発表になつた》朝、《私たちが宿泊してゐた旅館の女中さんの一人が帳場の机に凭れて、涙をぼろぼろこぼしながら、新聞紙の発表者氏名の小さな活字の中から、誰かの名前を探し出すのに血眼になつてゐた》(89頁)ことから、宿泊客であつた兵隊二人が、玉砕を遂げたアッツ島守備隊であり、彼らから四通の手紙が届いていたことを知る。いずれも、女中さんへの感謝を枕に、現地の状況(風物、戦況)が綴られているのだが、ここでは次のような三通めの手紙を引いておく。

その後お変りは御座いませんか。三村君共々小兵も元気一杯にて服務して居りますから他事ながら御安心下さい。朝早くから色々の小鳥や雲雀がさへづるのを聞いてみると、うつとりして外征を忘れてしまふこともあります。内地も益々緊張して大東亜戦争完遂のために戦つてみられる事と存じます。小兵たちも此の最前線アリュージョンにて色々な点から物資を大切に致し、よく困苦に堪へて居ります。しかも将兵の士気は益々旺盛にして既に戦はずして敵を呑む

の概があります。どうぞ小兵たちのことには少しも御心配なく願えます。ツンドラ地帯にも、やうやく春が訪れて、黄いろい芽を出し初めました。どこから来たのか渡り鳥が可愛いゝ声で啼いて居ります。ツンドラの若芽を見るにつけ、小鳥の啼声を聞くにつけ、懐しい故郷が思ひ出されます。敵機は毎日やつて来てドンドンバリバリやつて行きます。先日建築材料を運搬中突然戦爆連合の編隊にやつて来られ、爆弾を見舞はれました。耳の鼓膜は破れさうになるし、眼玉は飛び出さうになるし、その時はいささか肝を冷しました。しかし我が皇軍には、全然毛唐の弾は当りませんから、どうぞ御安心下さい。(90～91頁)

こうした手紙を事後的に読むことを通じて、作中の《私》も読者も守備隊の生前の日常を想像する手がかりを得ることができる。しかも、実際の戦場に身を置く書き手による、(大本営発表や新聞報道などと異なる)私的な声であることが、現実性を高める効果をもったと考えられる。観点としては、a～eが書きこまれ、eが間接化されながらも当事者の声表象された点の特徴である。

第二に、長編と称すべき分量をもって、アツツ島玉砕から時間的距離をとった上で、現地における玉砕までの状況を具体的に再現していく創作として、川口松太郎の戯曲と鶴田知也の小説がある。

芥川賞受賞作「コシヤマイン記」以来、北方への関心を示してきた鶴田知也は、『アツツ島』(国民図書刊行会設立事務所、S19.6)を上梓する。《山崎部隊の玉砕に関する谷萩報道部長の放送は、全国民の心魂に徹しました》と「自序」を書きおこす鶴田は、《その深い国民的感動を、文章に移し得たなら、文学者としての最も光榮ある任務を果すものではないかと思ひました》(1頁)と文学者の役割にふれ、さらに《常々北方問題に関心をもつて参りました者として、秃筆を執るのやみ難き熱望と責務とを感じた》という、使命感を言明してもいた。ただし、《悪戦苦闘の末、全三十九章を生み出すことが出来》たにもかかわらず、《うち八章千余行は、暫く発表の時期を待つよう命ぜられましたが、幸にして、その筋において、著者の意図するところを諒とせられ主たる『資料』を編輯抄録することを許されました》(2頁)とある通り、アツツ島玉砕はデリケートなモチーフなのだ。

内容としては、アツツ島における守備隊の日々がていねいに描かれていくのだが、そこに、兵隊を主語として、《兵隊たちは、『国民』といふ音韻おんいんにさへ、かつてない甘美な響きと意味とを感じる》(90頁)という一節が差しはさまれ、兵隊と銃後国民との間に共感の回路が準備されていく。

基地を出帆する間際までは、しかし誰も、『国民』と自分との間のつながりを、これほど強く感じなかつたのは事実だ。[略]しかし今かうして遠く戦陣に臨んでは、いふべきことは何もなかつた。どう考へても氣に食はぬ人間もゐるにはみたが、それが何だらう。一切を引つくるめた国民に対する理屈をこえた一すぢの情愛で、胸はしびれるばかりだ。(91頁)

さらには日本の聖戦を、《わが日本民族が、新しい秩序の創造に己み難い使命を感じるのは、自然の大道に則る天性の自らなる発動に他ならぬ》(143頁)という言明もみられる。そしていよいよ戦局が緊迫してくると、「自序」で言明された通り本文は省略され、資料によって代替されていく。

本章以下八章[第三十二章—第三十九章]、千余行は五月十二日の敵上陸以後の情況を取扱つたのであるが、序文にも述べた如く、今暫くその発表をさしひかへねばならぬ。従つて著者は、その時期の来るまで、読者に御猶予を願ふの他にないが、しかし、大楠公の忠誠にもたとへられる山崎閣下とその部隊の奮戦の情況について知りたいとの国民の真摯な熱望に対して、軍

はしばしば、出来得る限りの発表をもつて、懇切に应へてゐる。〔略〕我々が、軍の懇切なる発表によつて、北辺の孤島に玉と砕けた二千五百の『神兵』の忠烈を仰ぶぐ豊富な『資料』を与へられたことは、感謝にたへぬところでなければならぬ。(197頁)

これ以降、『アツツ島』では国内の新聞報道にくわえ、《敵側発表と敵側従軍記者の手記三篇(わが国において翻訳発表されたもの)》(198頁)を抄録した上で、鶴田は改めて文学者の役割に言及していく。《茲に文学とは何ぞやを論ずるまでもなく、文学は、国民精神の純化と統一のために貢献する機能を持つものであり、文学者は正にそのやうな重任を果すことにおいてその忠誠を発揮すべきものである》(199頁)と言明する。つまり、鶴田によれば、アツツ島玉砕というモチーフは、《国民精神の純化と統一》のために文学者がとりあげる意義があり、そうした創作を通じて、文学者もまた、戦時下の文学者として国家への《忠誠》- 社会的意義も果たされていくのだ〔a～g〕。

もう一作、第一回直木賞受賞作家・川口松太郎による、脚本「アツツ玉砕」(『アツツ玉砕』非凡閣、S19.11、「若林中隊長」を併録)があるが、まずは二幕七場の構成を一覧として掲げておく。

序幕 第一場 演習地の廠舎／第二場 山崎連隊長の家／／二幕目 第一場 アツツ島の兵舎  
附近／第二場 幕舎内部／第三場 無電室／第四場 再び幕舎／第五場 幕舎の外

同書には、執筆経緯を振り返った川口松太郎「山崎部隊長に就て」が付されている。《去年の秋であつたか、松竹の大谷社長から電話で、猿之助一座に適当な上演脚本はなからうかと云ふ相談を受けた》(105頁)という川口は、かつて猿之助が演じた自作脚本「加納部隊長最後の日」を想起し、《急に戦争劇が書きたくな》り、《猿之助が山崎部隊長に扮したら面白くはないかと、咄嗟に思ひつ》き、その話を持ちかけると、猿之助も《大へん乗り気にな》り、《私も、どうかして猿之助に名を成さしめたいと思つて、真剣な仕事をしたかつた》(106～107頁)のだという。川口は、アツツ島玉砕というモチーフと猿之助を前に、《どうかして、好い作品を書いて、アツツ島の英雄に供へ、戦時文学者の任務を果したいと念じた》というが、執筆の困難についても次のように振り返っている。

資料を集めてゐる時は夢中だつたが、いざ、原稿用紙にむかひ合ふと、容易ならざる大仕事であることが、初めて身にしみて、こたへて来た。〔略〕書けなくなると山崎部隊長の写真を拝んだり、藤田嗣治さんのアツツ島の絵の三色刷りを出して眺めたりして、自分の頭がアツツ島の雰囲気からぬけ出して行かない工夫をした。(109～110頁)

書きあがつた「アツツ玉砕」は、松竹本社で川口本人による本読みが行われ、終わると皆で黙祷の運びとなった。《黙祷が終ると社長は、「御苦勞なすつたんですね、山崎部隊長は」と感に堪へた声で云》つたというが、《それは私の脚本に感銘したのではなくて、アツツの現実に改めて感動したのだ》と気づいた川口だが、《然し私はそれで満足した》(113～114頁)と記している。ここに、「アツツ玉砕」の意義、それを書いた川口の《戦時文学者の任務》は十全に果たされている。

本編では、アツツ島における守備隊の日々が綴られていくのだが、拡声音による通信を通じて、次第に追いこまれていく戦況が緊迫感をもって書かれ、ついに次のクライマックスへと至る。

大佐 只今より、全軍はマサッカカル峠を経て敵の主力に殺到、敵陣中に玉砕せんとす。醜の御楯として遠く不毛の地に入り、骨を北海の戦野に埋め、米英撃滅の礎石となる、真に、男子の本懐なり。況んや、護国の神となりて悠久の大義に生く、快なる哉。今や、為すべきを為し終り云ふ言葉なし。たゞ最後に、今一度くり返して申し伝へる(と、言葉の調子を改め)本月十二日、敵上陸以来、我が部隊の勇敢なる戦闘に対し、畏くも、天皇陛下より、優渥なるお言葉を賜りました。陛下には、我が部隊の戦闘経過に御軫念あらせられ、北辺の孤島に戦ふ草莽の上にも大御心をお加へ下されたのであります。山崎保代、つゝしみて、軍司令官に、御答礼の無電を發しました。電文は……われらは一致協力死力をつくして任務に邁進、以つて聖旨に応へ奉らん。(102～103頁)

最後の台詞は、米川《気をつけえつ、宮城に対し奉り最敬礼。》というもので、その後は《将校は剣を捧げる。兵は銃を捧げる。／莊重なる音楽起る。長いく敬礼の内に、一同の滂沱たる涙の内に、静かに、カーテンを下す。》(104頁)というト書きがつづき、玉砕直前に幕となる[a～g]。

他に、田中仁「辻シナリオ「アツツ島」」(『祖国』S18.8)があるが、やはり玉砕直前の山崎大佐の状況と心境とが切りとられている。場面の特徴が端的に示された一節を、次に引いておく。

**海上**——敵艦数隻、アツツ島に向つて一斉射撃。

**アツツ島**——至る所に大爆発が起る。

**部隊本部庭**——山崎大佐剣も吊らぬ散歩姿で、一枝の花を手折る。花の香を嗅ぎ詩を吟じ始める。(20頁)[b・e]

総じて、創作としての散文においては、アツツ島での状況がていねいに描写される点は随筆と同様ながら、玉砕それ自体は空白とされ、その後(他)のことは省筆される。また、守備隊への哀悼や、敵への復讐、戦意昂扬などが書きこまれることは少なく、それら(それらについての情報追加や想像)は読者の領分とされている。かわりに、アツツ島玉砕をモチーフとした創作(への取り組み)が、戦時下を生きる文学者としての社会性・存在意義の確保に直結すると言明されたことが、アツツ島玉砕言説の中における顕著な特徴であった。

\*

本稿の最後に、以上のアツツ島玉砕をモチーフとしたジャンルごとの分析を総合しておく。

第一に、ジャンルやそれと連動した分量的な長さが書かれる内容・情報量のある程度規定し、逆にいえば、同一ジャンル内での内容・表現は近接していた。それと同時に、ジャンルが異なれば、モチーフへの距離感や角度に差異がはっきりみられた。

第二に、守備隊が全滅した以上、表象不可能であるアツツ島玉砕というモチーフは、いずれのジャンルにおいても空白とされることが多く、言語表現はその周辺・前後に成立していた。

第三に、共通する要素としては、アツツ島玉砕という出来事／モチーフに関して、単純化を伴う事実の確認、その反復・拡声、さらには守備隊への哀悼やそこから展開して内地生活の反省、戦意昂扬などの、国民への共感や動機づけが喚起・促進される表現が志向されていた。

以上が、文学者によるアツツ島玉砕言説の特徴(最大公約数)である。

また、こうした言説がメディアを介して読者(国民)に届けられ、それが社会貢献につながるという想定の中で、文学者は戦時下における存在意義を確保し、周囲もその社会性を承認していたの

だ。こうして文学者は、アッツ島玉砕をはじめ戦争(報道)を契機として、国民の代理=表象を演じていく。

- 1 拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』(立教大学出版会、H27)、『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』(神奈川大学出版会、H30)ほか参照。
- 2 当時のアッツ島表記にはゆれが顕著だが、本文は「アッツ島」で統一し、引用は原文に従う。
- 3 山田朗「アッツとうのたたかい アッツ島の戦」(吉田裕・森武麿・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、H27)、16頁。
- 4 拙文「一九四三年五月一八月 アッツ島玉砕をめぐる文学場・文学者の動向」(『太宰治スタディーズ』H28.6)、24頁。
- 5 押野武志「モダニズム文学と「破碎される身体」——江戸川乱歩・葉山嘉樹・宮沢賢治」(中山昭彦・吉田司雄編『機械=身体のパリテイク』青弓社、H18)、40頁。なお、櫻本富雄『玉砕と国葬 1943年5月の思想』(開窓社、S59)、小林真二「日映時代の坂口安吾をめぐるノート(四)——「アッツ島」・「大東亜鉄道」——」(『語学文学』H28)もあわせて参照。
- 6 もちろん「散華」は本稿の検討対象となるが、拙論「太宰治「散華」における“小説”と“詩”」(「太宰治スタディーズ」の会編『太宰治と戦争(仮)』ひつじ書房、H31 予定)にて詳論予定のため、紙幅の都合もあり具体的な論及はしなかった。同論をご参照頂ければ幸いである。